



長州藩と津和野藩との境、野坂峠までもうすぐのところに来ている。この番所跡から国道を離れて左手の旧道を進めば峠までは1kmもない。ただ江戸時代には、峠という地形的な難所の他に、もう一つの厄介な街道取締りの番所があったわけである。この関所とも言うべき番所は1606年に設けられたと伝わるから、毛利氏が防長二州に移ってから、すぐのことになる。ただ、



イラストでたどる石州街道

34

野坂番所

津和野との県境の手前には野坂峠があり、かつてこの峠の西側に「御口屋」と呼ばれる役所があった。藩では慶長十三年に徳佐下山の藤井孫兵衛に街道取締りや運上銀の徴収を命じ、藤井家は以後四代にわたってその役を務めた。貞享二年にこの役所が「御番所」と名を改められると、明治2年に廃止されるまで藩は「御番所山方」と呼ばれる藩士を派遣してその役を引き継がせた。

イラストの石垣はその遺構である。風土注進案に「三間半梁五間桁行茅葺、門構前左右堀覆後竹垣」と書かれていることから、建物は17坪程度の茅葺で、門が設けられ、前と左右には堀（溝？）があつて、背後は竹垣に囲われていた、ということだろうか。

文イラスト II
古谷眞之助

隣の津和野藩と長州藩とは、敵対する藩どうしではなかったようである。というのも、参勤交代時に津和野藩主第11代亀井茲監が石州街道を歩いて、山口市内にあった脇本陣・安部家に宿泊した記録が残っているからである。「亀井隠岐守宿」という関札が山口県立博物館に保管されている。もともと津和野藩は参勤交代時には芸州と石州を結ぶ芸石往還（六日市～廿日市経由）を利用していたが、山深い難路だったため、幕末になると専ら石州街道を利用して山陽道に抜けていたからである。そのきっかけは1846年に急用で江戸に行く必要が生じた時、通常ルートは大雪だったため、長州藩に「本陣は狭くて構わない、清掃も不要、もし本陣が無理なら寺でも構わない」という低姿勢で通過を要請したことに始まると言われている。そういうこともあったためだろう、例えば、幕末四境戦争の際、大村益次郎が軍を率いて石州口の浜田藩を攻める時には、津和野藩は中立的態度で長州軍の通過を黙認している。ただし、津和野藩との関係はさておいても、この時長州藩は、当時の藩都山口を囲む峠という峠すべてを厳しい監視下に置いた。鯖山峠、一の坂、大峠などがその例である。

ここ野坂番所の広さは17坪程度と推定されるので僅か60㎡弱の小さな建物に過ぎず、当初は藤井孫兵衛とその郎党だけで管理したようだから、ごく小規模な関所のイメージである。藩都山口からは40kmも離れており、それも頷けるというものだろう。現在では石垣を残すのみというも、それに相應しい。（2025.1.24 記）